

## 税は幸福をつなぐバトン

大分大学教育学部附属中学校 3年 中川 美羽

私は、湯けむりがもくもくと立ちのぼる景色が好きだ。私が住む大分県別府市では温泉などの観光業が盛んで、多くの人を訪れる。

そんな温泉に関してつくられた税が、入湯税。これは、鉱泉浴場における入湯に対して入湯客が納める税金である。鉱泉浴場とは、一般的に、天然温泉と呼ばれるミネラルを含んだ水を使った浴場のことを言う。「なぜ、入浴料を払っているのに税金も納めなければいけないのか」と思う人は多いと思う。だが、私は入浴料と入湯税は大きく違うものだと考える。入浴料は、お風呂を提供してくれた施設に払うものであり、その施設やお風呂の維持費に使われることが多い。それに対して、入湯税は市町村に納めるもので、地域全体のために利用される。現在、銭湯や宿を利用する人は当たり前のように清潔で、整備された温泉に入っているが、それは徴収した入湯税のおかげである。入浴料だけでは、温泉を衛生的に保つことはできないだろう。つまり、入浴料は「今」、入湯税は「未来」の温泉をつくっていると言える。

こういった入湯税の話聞いて、「銭湯や宿の温泉を使わない人には関係ない」と思う人もいるのではないだろうか。だが、それは違う。税は納税した人だけが恩恵を受けるものではないのだ。入湯税は消防施設の整備にも使われている。他にも、環境衛生施設や観光の復興などにも利用できる。入湯税によって地域の安全が守られ、地域の発展のためにも役立てられている。税が、私たちの市町村と、そこに住むすべての人を様々な面から支えてくれていることを忘れてはいけない。

これらのことから、私は考えた。入湯税によって、将来に繋げられる「持続可能」な温泉や、安心できる社会がつくられているのではないかと。

今を生きる私たちだけでなく、未来を生きる人たちの幸福をつくる。そして、私たちに幸福を繋いでくれた人たちに感謝を示す。それが税金の役割だと思う。「税を払わされている」「税は負担だ」という意識の人が多いかもしれないが、その税によって私たちの当たり前の生活がつくられているということを考えなければならぬ。税による恩恵を当たり前と感じているように、税を払うことも当たり前と考えられるようになりたいと思う。私は、身の周りにある多くの税の恩恵や、その税を払い社会を支えてくれている人の存在を意識して生活し、「納税の義務」について考えていきたい。そのために、税を大切に使いしていきたいと考えた。学校の机や椅子、教科書を大切に使うなど、私たちができることは身近に多くある。これらのことを少しずつでも続けることで、将来に幸福を繋げられる社会を自分たちの手でつくっていききたい。そして、社会を税金から多様な視点で見られるような人になっていきたい。